有島記念館と歩む会

土香る会

会報９号
2020 年
3 月 31 日発行

TSUCHI-KAORU-KAI　NEWSLETTER　VOL.9　March 31st. 2020

■目次

□巻頭言：アンサング・ヒーロー／土香る会会長　井上剛 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
□有島農場解放記念碑周辺の史跡保全地区指定を望む／事務局　梅田滋・・・・・・・・・・・・・・ 3
□活動報告と今後の予定（土香る会、有島記念館、有島謝恩会）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
□会の運営を話し合う・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
□交流広場：会員の想い、会員の声／菊地寛、梅田滋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
□ラジオトークに出演して：収録後の感想ひとこと／川村洋司、マイケル・バーンズ・・・・・・・14
□有島に吹く風：帰りなんいざ、オリオンの囁きが／土香る会副会長　菊地寛・・・・・・・・・・16
□編集後記ほか：・・16

巻頭言

アンサング・ヒーロー

土香る会会長　井上　剛

道新の夕刊に「名もなき生涯」という映画の紹介があった。第二次大戦下のオーストリアがドイツに併合され、その小さな村の農夫である主人公に召集令状が届く。信仰や良心からヒトラーへの忠誠を拒否する主人公は出頭し、逮捕され、拷問を受ける。妻も裏切り者の家族として村人から差別される…という話だそうだが、同調圧力が高まる中でも主人公は反戦を貫いたとあった。

その映画の最後に英国人作家ジョージ・エリオットの言葉が出てくる。

「社会をまともな方向に導いているのは歴史に残らないような行為の積み重ね。名もなき生涯を送り、誰も訪れない墓に眠っている人びとのおかげなのだ。」

この言葉から映画の題名が付けられている。注目を浴びるわけでもない一生を送って眠りについた人の、生前の何でもない行い。それが社会をまともに保っているという指摘はさすがと思うが、永の眠りについた人が社会をまともに保とうと意識して行動したとは思えない。意識しなくてもまるで本能に導かれるように、まともな方向に作用する行動が取れる。そういう人が多ければ、国という大きな単位であれ、地域社会という小さな単位であれ、暮らしていて安心な社会だと思う。

この趣旨とよく似た話を読んだ記憶があるので必死で思い出す。仏文学者・武道家の内田樹（たつる）氏が書いた「道徳について」。新明解国語辞典で「道徳」を引くと、「社会生活の秩序を保つために、一人ひとりが守るべき、行為の基準」とある。誰かが代わりに定めてくれる「行為の基準」なら、それは「みんなで守る」べきものであって「一人ひとりが守る」という限定は不要。敢えて「一人ひとりが」と書いてあるのは、決めるのも自分、守るのも自分、との主張である。

分かり易い。道路のゴミを拾う、席を譲る、家の前の雪かきをする。そういう人が全員でなく、30～50人に一人いたら世の中は十分住み易いと続いた。なーるほど。道徳を考えるとき、全員がそうすべきだと思い込んでしまう落とし穴があるから、全員である必要がないというのは面白い視点だ。

英語に unsung hero（アンサング・ヒーロー、詩歌で称えられていない影の英雄）という言葉がある。先に挙げたゴミを拾う人、席を譲る人、雪かきをする人はこれに当てはまる。誰かが引受けなければならない仕事があるとすれば、それは自分の仕事だという考え方をする。それが道徳的ということだと内田氏は言う。

「名もなき生涯」を送り、誰も訪れない墓に眠っている人びとの、歴史に残らないような行為の積み重ねが社会をまともにしている。行動を決めるのも自分、守るのも自分。これが道徳。他人に決められてたまるか。

『表札』（石垣りん）

自分の住むところには
自分で表札を出すにかぎる。//
自分の寝泊まりする場所に
他人がかけてくれる表札は
いつもろくなことはない。//
（中略）
様も
殿も
ついてはいけない、//
自分の住むところには
自分の手で表札をかけるに限
る。//
精神の在り場所も
ハタから表札をかけられてはな
らない
石垣りん
それでよい。

有島農場解放記念碑周辺の史跡保全地区指定を望む

事務局　梅田　滋

1月27日に開催された有島地区におけるA建設株式会社従業員等宿舎建設事業に関する「住民説明会」に、土香る会からも会員数名が参加しました。この開発事業は、弥照神社や有島農場解放記念碑のすぐそばに、従業員等100名規模のプレハブ式宿舎二階建仮設建造物を三棟建設するというものでした。

土香る会が重大な関心を持って住民説明会に参加したのは、この場所が、有島武郎が経営しのちに無償解放した有島農場の「聖地」ともいうべき心臓部にあたる史跡空間であるからです。

その空間に、史的意義と全く相容れない性格と仕様の建造物が、2～4年間という期限付であれ出現することは、土香る会としてはどのように考えても容認できないことと思えました。

「住民説明会」は、ニセコ町景観条例に基づいて行われるものですが、今回の説明と質疑からは、町による着手同意の前から既に一部着工されていたことや、景観シミュレーションが規定の方法を無視したものであったこと、景観条例諸規定についての理解不足があったことなどの諸問題が、明らかとなりました。

地元地域住民やオビラメの会、そして私たち土香る会などの批判を受けて、会社側は再度の住民説明会を約束して、予定時間を超えたこの日の説明会が終わりました。

その後、地元町内会では反対署名活動が進められ、圧倒的な割合で反対署名が集まっていたようです。

そのような状況を背景に、地元有島地区住民グループとオビラメの会、ニセコ環境評価の会、そして土香る会を含む四者が集まり、ニセコ町に対して景観条例の見直しを要望する「申入書」を作成すると同時に、事業者に対して早急に二回目の住民説明会を開催するよう、ニセコまちづくり研究会の追加加盟を含む五者連名による「申入書」をA建設ニセコ営業所に届けました。

ニセコ町景観条例は、これまで様々な開発案件の適否を見定める上で効果的な規制を発揮してきた、との説明がニセコ町によってなされてきましたが、近年相次ぐ開発ラッシュの中で、必ずしも景観条例が有効に機能していないのではないか、と疑わせる状況も耳にするようになってきました。

そんな中での今回の有島地区における「住民説明会」に参加して、景観条例がややもすると形骸化しかねないような状況が進んでいることを現場で認識でき、深い危機感を感じました。具体的に景観条例のどこに不十分性の課題があるのかも、かなり明確にわかってきました。

今回は結果として、開発事業者が有島地区での従業員宿舎建設を断念する判断をしたことで、私たちの危機感は当面の間遠ざけられました。しかし既に用地が当該事業者によって購入されている以上、この地域が不適切に開発される可能性がまった無くなったことにはなりません。

この地が有島農場の歴史にとっての「聖地」であることや、狩太共生農団時代も有島謝恩会の時代になってからも継続的に地域コミュニティ紐帯の要となっていた場所であったことを踏まえ、このエリア一帯を史跡保全地区として指定するようニセコ町に促し、そのためにも事業者が購入した土地を町で買い取ることを求めたいと思います。

地域の歴史は、現在から未来に向かう状況の変化の中に適切に反映されてこそ、文化的にも生活面の価値としても誇りが持てる地域づくりにつながるはずだと、改めて確信できました。

活動報告と今後の予定

□土香る会の事業報告

（４月～９月）

１　読書会の報告

第30回読書会のまとめ

畔柳二美『姉妹』　10／26

参加９名、感想文６名

対照的な二人姉妹を中心に展開する小説です。二人の違いは性格、育ちから来るものでしょうが、その時代の２つの大きな流れ・考え方を代表させたものではないかとの指摘がありました。

参加者の中には、父親が畔柳二美と一学年違いで、王子第一発電所の社宅で子ども時代を過ごしたという人もいました。小説に出てくる情景を懐かしく思い出したり、悲惨な出来事（例えば、馬がそりを引きずって暴走し川に転落したときは、暴走を目撃）の記憶も蘇ってきたそうです。

小説に出てくる当時の風俗習慣に対して、赤飯には今と違ってどこでも小豆を使っていた、お風呂や温泉は混浴だった、尻別川周辺で出る温泉はぬるくて電気で沸かしていた、王子発電所の社宅は電気代が只だったなどの情報も。さらに、北海道の百人一首で今でも下の句のみで木札を使うのは覚えるためではなく単なる遊びとしてやっているからなど、ご当地ならではの感想が相次ぎました。

小説に出てくる、女は10歳まで、男は17歳まで親が面倒を見るという実態は、当時は当たり前の考え方だった。当時狩太村に女学校はなかったので、札幌という都会に行ったらさぞ刺激があっただろう。女学校に行けたのは裕福な家庭だったという話も出ました。

作品中の音の表現に注目した感想がありました。ごうごう、だぶんだぶん、チロロチロロと聞える尻別川の流れを一大オーケストラに喩えた畔柳二美は、別の作品『川音』でもゴウゴウと表現しているそうです。こういう表現はオノマトペと称されます。参加していた米国出身の国際交流員は、日本語は世界で一番オノマトペが多い言語だと習ったと言います。

さらに、音にまつわる話として、太宰治の『トカトントン』に飛びました。玉音放送に触発され徹底抗戦だと叫ぶ将校に突然聞えたトカトントンという復興の金槌の音。その途端、目からウロコ状態になる話らしいのです。それを聞いた別の参加者からは、心が高ぶっているときにトカトントンという現実的な音がすることで一気に正気に引き戻されるということではないかとの意見が出ました。引き戻すきっかけになるのが音を表したオノマトペです。擬音語が重要な役割をすることに気づかされました。

王子の社宅に住んでいた人にとっては、音（川の音やタービンの音など）は日常どの場面にもある当たり前のものだったが、反面とても恐ろしいものだったという回想が出ました。線路の側よりも川の側がましだという感想や、聞いて育った音は、自分の居場所が変わっても自分の中でずっと続いているのだという恐らく体験に基づく感想もありました。

『限りなき困惑』『川音』『傷痕』『姉妹』と読んで互いの関連を探った感想がありました。初めの３作は『姉妹』とは違い、暗く重い路線の作品だそうです。重い作品の契機となったのは作者自身の夫の戦死。遺骨がなく位牌だけの戦死通知という戦時社会のルールなのだが、位牌に書かれた霊という文字が間違っていることに気づいて夫の死を疑い、自分を取り戻すというエピソードが２つの作品に書かれています。このエピソードを聞いてすぐに、字の間違いは太宰の「トカトントン」と同じ働き

をしているという指摘がありました。真面目に思い詰めていたのに、本来その場にはありえない字の間違いや音に接して、自分が馬鹿らしくなった。「突き詰めて考える」ことの実体は意外にこういうものかもしれません。

また、これをきっかけにして作者畔柳二美は、社会の価値観、同調圧力に屈することを拒み、自身の魂が求める信念によってのみ生きようとする「自由」の宣言をした、との分析もありました。どの作品も主人公は二美自身だそうです。

第31回読書会のまとめ

阿部信一『屠殺』 11／23

参加8名、感想文7名

前回の畔柳二美に続いて、子供の時代にニセコ町（狩太村）で暮らした作家として、阿部信一氏を取り上げました。話し合いには3つの大きな流れがありました。

その一つは『屠殺』のねらいをどう見るかということです。

『百姓の子』という作品に転校生智子の話を書き加えたのが『屠殺』だという紹介がありました。それまで辰三が生きていた、厳しい、悲惨な『百姓の子』の世界に智子が入ってきたことによって、辰三は『屠殺』の世界に蘇ったのだという考えです。人を差別して生きることに代表される人間の本性のおぞましさを、題名に象徴させてえぐり出そうとした試みが『屠殺』のねらいの一つ。このおぞましさに対する救済として書かれているのが、主人公辰三が少年期から大人になっても変わらず持っていた純真さで、これがねらいの二つ目だという意見がありました。

記録性をこそ第一に考えるべきではなかったかとの声が上がりましたが、記録性の重視は智子の話があっても尊重されているという意見も出ました。先に2つのねらいという意見を紹介しましたが、記録性プラス智子の話があって、『百姓の子』とは別の『屠殺』という作品になっているというわけです。

大きな流れの二つ目は、新たな視点を据えるということです。3つ紹介します。

①他の参加者が気づかなかった農耕馬の存在について触れた参加者がいました。飼っていた農耕馬が致命的な病気で屠殺されることをきっかけに辰三の家族が崩壊していく。何故か？開拓農家にとって馬は開墾作業の中軸的存在でしたが、それに加えて家族の心が寄り添う象徴でもあったからだという指摘でした。それで『屠殺』という題名なんですね。

②ラストシーンを考えた参加者がいました。小説では理沙が東京に帰ろうと列車に乗り込むときに、その列車から先に降りた人が「辰三さんでないか」と名前で呼びかけたため正体が明らかになる筋書きです。そこを、呼びかけると同時に鳴った発車の警笛音と重なって理沙に聞えず、列車のドアが閉まってしまう、と書き換えました。男の名を種明かしせず、余韻を残して進行するシナリオを考えてみたとのことです。

③作品に対して違和感が残るという感想の参加者がいました。貧しいとは書かれているが…。物言いが丁寧すぎるのでは？愛馬の命と引き換えにもらったお金を川に投げ捨てる？教師たちがあまりに理不尽。自分も王子発電所社宅を始めとしてニセコ町で暮らしてきたからこその違和感だという声がありました。作品の世界が昭和初期くらいと考えればそういう実態もあっただろうという声も。

読書会の大きな流れの3つ目は、『屠殺』から別の視点へ移るということです。これまた3つ紹介します。

①主人公辰三のその後を考えた人がいました。小説では智子が

東京に戻って音信不通になり、その数十年後、娘の理沙が母の昔の恋人辰三を探しにやってきて巡り会い、また来ることを約束して戻っていくシーンで終わります。

そしてその後です。理沙が結婚して娘が生まれるが、しばらくして夫が、そして理沙自身も亡くなってしまう展開です。夢の中で智子、理沙の母娘から3歳の辰子の世話を託された辰三が、新たな人生に踏み出す覚悟をするところで終わります。

②様々な人から聞いた話を掌編にまとめた人がいました。この参加者にとって、暴力を振われたり、家族がバラバラになったりと非情な状況に陥っても「辰三はいい男だ」。強い人だとも。『屠殺』の中には、教員や獣医など非情になってしまった登場人物が出てきて辰三は苦しみますが、その人たちのことも「どこかで人としての生き方を失う、救いようのない経験があったのか」と思いやります。そして、どういう生き方をするかを決めるのは、生い立ちとか受けた教育とか置かれた状況などがすべてではない、とも言います。

この参加者の掌編の中で語られる経験は救われないまま、普段は心の奥深くにしまわれています。それを根気強く聞き出して記録していく。一人ひとりの話をそのまま受け止めている温かさを感じるとか、各人の体験談がそれぞれの世界を持っていると同時に、それを集めた全体も一つの独特の世界を作っている印象があるなどの感想がありました。

③屠殺という言葉からの連想で、動物を食べる視点の話が2つ出されました。

一つは、自然体験サマーキャンプでの炊事風景。もう一つは農業高校生が実習で肉牛を飼う話です。発達した社会に暮らす私たちは、動物を自分の手で殺して食料にする経験はまずありません。食べている肉と生きている動物とが結びつかず、全くの別物だと思っている人は大人子どもを問わず大勢いるはずです。分業化された社会だからこそ食を巡る事実に目を向けてほしかった、ということでした。

第32回読書会のまとめ

有島武郎『迷路』　2／15

参加7名、感想文1名

序編と本編からなる『迷路』の主人公は誰なのか。序編ではAとも「僕」とも呼ばれ、本編ではAとも「彼れ」とも呼ばれますが、有島本人であるような書きぶりに思えます。特に「首途」(序編)は日記体で書いてあり、有島が実際に書いた日記の内容を基にしています。

作品を通して出てくるAというイニシャルから有島のことだと先入観を持ちますが、謎解きがありました。Aというのは有島と彼の友人安部の両方をモデルとして混ぜてある。ともにAであるので意図的に使ったらしいと。有島が試みた小説手法の一つだということです。いかにもその人・その場所らしく読者に匂わせておきながら違う部分を意図的に組み込みます。その手法は「首途」(15)の翌年に書かれた『カインの末裔』の舞台が狩太村（現ニセコ町）だという設定にも試みられているとのことでした。

『迷路』に限らず、有島作品によく出てくるのが二元論、二面性です。愛と愛欲（精神と肉体や霊と肉も）の対立や『迷路』では自由論と決定論などです。二面性では、本音と建前や外面と内面が参加者から出てきました。有島の場合は二項対立の悩みが尋常ではありません。自分から徐々に深みにはまっていく有島の態度を一歩退いて眺めている人もいるようですが、どういうことに悩み、何故悩んでいるのかを作品を通して知ろうとすればいいのでしょう。

なぜ『迷路』という題名なのか。迷路に出口はある派とない派に分かれました。遊園地などにある迷路は娯楽施設ですから当然出口があります。この作品では、出口の明かりが見えたと思って行ってみるとまた見えなくなる繰り返しだと感じた人が多く、それを円環（ループ）やメビウスの輪のように感じたと言います。『迷路』序編の最後は「唯静かに、静かに、静かに」で終わっていますが、本編の最後にも「静かに…静かに…」と同じ言葉が出てくるのが循環の象徴だという指摘もありました。

本編の最後でKが息を引き取る直前です。Aに漏らした言葉は途切れ途切れなので補いたくなるという感想が出ました。作者としては分かっていて、頭の中には全部書いてあったという意見。何て書こうか迷っていた、考えていなかったなどもありますが、読者に考えさせる（考えてもらう）ためという意見も出ました。

時間の余裕がなくて、ほとんど触れずじまいになったのですが、感想文参加がありました。その前半で有島が抱えていた悩みの部分を時代背景や家族関係、同時代作家との関係などを軸に提起し、後半では「首途」を取り上げて論じてあります。筆者本人から、どう理解してよいか分からないと読書会への投げかけもありましたので、提出された感想文を各自読んで次回話し合うことにしました。（文責：井上剛）

2．土香るラジオ文芸館

月	月間テーマ	ゲスト（インタビュー）	ゲストとの話題	会からのお知らせ	館からのお知らせ
10	有島ポンドのイトウ①	川村洋司	イトウってどんな魚？	小日向敦子	ジガジーサンズ
11	有島ポンドのイトウ②	川村洋司	イトウ保護活動のこれから	ジガジーサンズ	
12	有島武郎と台湾	蔡焜霖	有島武郎と白色テロ	樋原豊	
1	有島武郎とアメリカ②	マイケル・バーンズ	アイルランド移民と南北戦争①	（なし）	
2	有島武郎とアメリカ③	マイケル・バーンズ	アイルランド移民と南北戦争②	ジガジーサンズ	
3	有島農場の範囲	工藤達人	フットパスの魅力と有島地区	ジガジーサンズ	

3．有島謝恩会の事業への参加

3・15 有島地区の春の弥照神社例大祭がコロナウィルス対策により中止となり、各自が個別にお詣りすることになったので、土香る会の会員も各自の判断で個別にお詣りしました。

□土香る会の事業予定（4月～9月）

2020年度上半期に実施予定の主な事業は次の通りです。

（1）会報10号発行

（2）読書会

上半期は、3月に延期となった有島武郎『クララの出家』から始まり、有島武郎の作品を読みます。

（3）土香るラジオ文芸館放送

（4）星座忌

（5）カフェ土香る

（5）視察研修旅行

（6）有島地区を考える未来会

（7）ホームページ作成

（8）聞き取り調査

（9）デジタルアーカイブ事業

□有島記念館の事業報告

（10月～3月）

○企画展

◎第31回有島武郎青少年公募絵画展（10・26～11・10）

※表彰式・審査講評（11・2）

◎冬の藤倉英幸展 Part3「北海道の風景を旅する。vol.2」（11・23～3・15）

※関連イベント：藤倉英幸ギャラリートーク＜風景取材と絵にするとき＞（2・1）

●3月28日から開催予定だった「かこさとし展」は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、開催時期を変更することとなりました。日程についてはまだ、確定していません。

○普及事業

◎鉄道遺産を考える講演「北海道の簡易軌道とまちづくり」（9・28）

※関連企画展：パネル展「釧路・根室の簡易軌道」（9・28～3・15）

◎鉄道遺産を考える講演とパネル展「北海道の鉄道」（10・6）会場：ニセコ中央倉庫群

・「9643」上屋＆転車台修復完成記念式典

・講演会「ニセコ町の鉄道遺産」

・講演会「ニセコエクスプレス製造などについて」

・講演会「博物館が鉄道遺産を収集する意義」

※関連企画展：荒川好夫写真展「北海道 冬～蒸気機関車C62栄光の記録～」（10・5～3・15）

◎「西富遺跡」発掘成果発表講演会（11・3）

◎Niseko winter music festival pre-concert「ニセコの冬に響くヴァイオリンの音色」（12・10）

◎野瀬栄進ジャズ ソロピアノコンサート（1・18）

※関連写真展：野瀬栄進写真展
＜Out to world　野瀬栄進が観た世界＞（1・18～3・27）
◎冬の有島記念館コンサート
「ニセコの冬をたたえる歌の調べ」（2・1）
※3月7日開催を予定していた「宮山登山会」は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、中止となりました。

□有島記念館の行事予定（4月～9月）

○企画展
新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、新年度の企画展・普及事業については「星座忌コンサート」以外は、開催時期を確定することができません。日程が決まりましたら会員の皆様にお知らせしますので、もう少しお待ちください。

○普及事業
◎星座忌コンサート：札幌コダーイ合唱団（6・7）

□有島謝恩会の事業紹介

有島謝恩会は、有島灌漑溝と弥照神社の維持管理活動を行っています。

○有島灌漑溝の泥上げと草刈り
有島武郎と吉川銀之丞が大正10年に造成した灌漑溝は、現在も現役で水田に用水を供給しています。羊蹄山を水源地とする冷涼な水温を日照熱で温めるため、水路の傾斜を緩くして水がゆっくり流れるようにし、地形との高低差を所々に設けた斜段で調整する機能を維持するため、毎年、有島謝恩会と水利組合は地域の人々に参加を呼びかけ、延長4キロメートルを超える灌漑溝の全線で、5月に泥上げ、6月に草刈りを行っています。
大正10年以降、有島農場時代から共生農団そして農団解散以降へと続く長い歴史の中で継続してきた営農施設管理作業ですが、農家の高齢化と後継者難による離農傾向が続き、農家だけでは維持が難しくなってきました。
しかし近年は、有島地区の新住民からも参加する人が増え、また、地域外の有志による作業への参加も見られ、有島地区の営農施設の維持だけでなく、旧有島農場の原風景の維持にも結びついています。

○弥照神社のおまつり
有島武郎が大正11年に農場の無償解放を告げた場所弥照神社は、有島謝恩会が春と秋に例大祭を行っています。また、元日には、誰でも初詣でができるよう社殿を開放しています。例大祭の参拝や直会（なおらい）には、地域外からの参加も可能とのことです。有島農場を支えた地域の人々の名前が記された木札などが社殿内に掲示されており、地域にとっての歴史的な意義を再確認する機会として、大切にされている祭事です。
地域内外のどなたも例大祭や直会に参加できるそうですので、有島謝恩会との交流に参加しませんか。

会の運営を話し合う

■役員会議

２０１９年度後期の役員会議は、次の通りです。役員会議は開催の都度、メールでご報告しています。

①　役員会議／１月25日（土）

１【協議事項①】『会報』第９号

・２０２０年３月31日発行予定

・一部修正の上承認された

２【協議事項②】カフェ土香る（第３回）

・２０１９年度「第２回カフェ土香る」の報告

・今後の進め方（日程～２０２０年？２０２１年？ほか）

３【協議事項③】読書会の今後

・別紙企画案が承認された

４【協議事項④】土香るラジオ文芸館の今後

・別紙企画案が承認された

５【協議事項⑤】役員改選

・理事の退任申し出もあって、役員の改選について意見交換を行った。

～総会において、事務局からの役員案をご提案しますが、会員の皆さんからの直接の自薦、他薦をお待ちします。大歓迎です。

６【報告事項】

●「デジタルアーカイブ事業」

～新年度から活動再開予定

●会員および会計の状況

～会員数72名

～「理事者手当」の議論があったので、総会に提案することとした

●ホームページ

～作成準備活動を継続する

７　その他

●会の活動への参加活性化に向けて

・案１：記念館常設展示コーナー等の多言語解説を実現する「検討チームへのスタッフ募集」

・案２：新たな出版を実現するための「入力作業参加チーム」の呼びかけ

・案３：２０２０年は有島農場入墾１２０周年なので、アニバーサリー企画を検討したい

・案４：「有島の映像」企画案の取りまとめについて～総会に中間報告書を提出

※情報提供：１／27有島地区における建築物に関する住民説明会に参加しようという提案

●年次総会の開催日

２０２０年４月18日（土）

14時～16時

有島記念館ブックカフェ

■会員へのお知らせ

●会員募集のお誘い

会の自主事業の財源を会員のみなさんの会費で賄うために、会員70名を目指していましたが、現時点での会員数は、72名となりました。

周りの方にもこの会報を渡していただき、会員になって一緒に活動してくださるようお誘いください。

交流広場　会員の想い、会員の声

白闇は時の隧道か
出口を透視する「氷の蒸気機関車」―ドラマシナリオの軌跡―

菊地　寛

今年も３・11が巡り来て、ラジオニセコ放送局ではドラマスペシャル「氷の蒸気機関車」を、例年通りこの日の特番として放送、となるはずでありましたが、収録前々日、制作・放送を延期しました。録音室という特別な空間での、新型コロナウイルスの感染リスクを回避するためでした。国境を越えて、地域にも及んでいる昨今の事態。しかし困難に遭遇しても必ず乗り越えることができる、とはこのドラマのテーマでもあります。

白い闇の先に、何が見えるか。今回のニセコの森の物語も、いつか耳を傾けていただける日が来る、と出口を透視し、氷の動

輪をここで少しだけ手回してみます。

物語は、厳冬の2月の夜、長万部から北上する函館本線山線の気動車が吹雪で立ち往生するシーンからです。プロット（ドラマの運び）を抜粋しますと～乗客の姿はまばらだが、それぞれ事情を抱えて乗り合わせている。

その一人に最先端のＩＴ会社で疲弊し、無理解な上役に辞表を出して、横浜から鉄道を乗り継いできた20代の大樹七海がいる。彼女の耳にふと、

「野原から汽車の音が聞こえてきました。

その小さな列車の窓は、一列、小さく赤く見え」と女性の声。

鉄旅朗読者・白国令である。

さりげなく唱和する森の哲学者・大井信夫、

「その中にはたくさんの旅人が・・・」と受ける。

少し離れた座席の間で交わされた低い呟きは、幼かったころの七海が亡き母から繰り返し聞かされていた宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」の一節であった。

おや、と振り向くと、二人は初対面の挨拶をかわしている。聞くともなしに聴こえてくる二人の会話に、

「ニセコの森の古い民宿で小さな朗読会が開かれるらしい。取り上げるのは『銀河鉄道の夜』のようだ」

七海は、二人のやりとりに導かれるように「私も一緒に連れていって」と頼み込みこむ。そこへ救援のラッセル車の轟音が響いてきて～。と、ストーリーは動きだす。

こんな物語ができないかな、と考え始めたのはいつだったか。思い起こせば１９８５年（昭和60）２月、札幌駅西口に氷で造られたアメリカン陸蒸気・弁慶号が登場し、出来栄えを見上げた時でした。「氷の蒸気機関車」をモチーフにして、と漠然とした創作への想いが心に刻まれたのです。あれから35年ほどたってしまいましたが、氷漬けにしていたわけではありません。

折々考え続けて、今回、ニセコを舞台にしての脚本に仕上がった、というのが内々の軌跡ではあります。

ドラマの後半では、七海たち民宿の仲間は猛吹雪に遭遇し、夜になって廃窟に避難します。ここはかつての鉄道トンネルです。さあ、ここからの運びは、先端技術に長けている七海の瑞々しい発想力を生かしたい、それをこの物語のけん引力にしてみようと、と構成にも勢いがつきました。

おりから、土香る会では、函館本線のレール切り替えで使われなくなった旧真狩トンネルの踏査を計画されました。これぞ天祐、自分も参加して吾錆脳に刺激を、と勇んだものの悪天候のため、その年は延期に。続く昨年も天気が良くなく、結果は中止となりましたが、なんと、その前に天は我に味方です。事前調査隊のメンバーに加えていただき、昨秋、現場を確かめることができたのです。

実際に歩いてみると、ドラマで描いたバーチャルな情景設定とは異なっていましたが、第２稿、第３稿と進めてゆくときの自信となりました。その旧トンネル跡にオーバーラップするようなワンシーンでは、～

洞窟のような古いトンネルの中に避難して夜を迎えた民宿の仲間たち。朗読者・令の語りが、

「汽車やその学者や天の川やみんないっしょにぽかっと光って、またしいんとなくなって、その一つがぽかっとともると、あらゆる広い世界ががらんとひらけ」と。

「銀河鉄道の夜」からである。

ここから七海が真骨頂を発揮す

る。テーマ曲が変調する。白い闇の世界を凝視する仲間たち。トンネルの出口。はたして、氷の蒸気機関車は動き出すか。～と、ご案内はここまでとしましょう。

新型コロナの感染危機が去れば、地元の声優の皆さんがいつものように録音室内のマイクの前に立って、のびのびとセリフを発します。長時間、大仕事の声の収録に続いて、編集、音響・効果音入れ、そして手の込んだ一本化仕上げなど、放送局のスタッフが精魂込めての制作作業に入ります。

時至れば、出発進行のキュー（収録合図）です。「氷の蒸気機関車」のレール音は「雪華の歌声」に重なりましょう。ラジオニセコのＦＭ波は、巡り来る春の訪れを告げています。

三・一と「蛍の光」と有島武郎

梅田滋

過日のことだが、偶然眼にしたYouTubeに心が激しく揺さぶられた。韓国語はわからないが、冒頭から惹きつけられた。

１９１９年３月１日、日本の植民地支配に立ち上がった韓国民衆の抗日デモが日本軍によって武力弾圧されるシーンのあと、映像はコンサート会場に変わり、音楽が流れた。

その音楽に、驚いた。

獄中の「柳寛順（ユ・グアンスン）」の表情がステージのバックに大写しにされ、「蛍の光」のメロディが流れた。

「どうしてこの曲が・・」

その時に受けた強い感動で、今思い起こしても熱いものが胸にこみ上げてくる。

そのメロディが「柳寛順」の心を表すかのようにワンコーラス流れ、そのまま引き継いで、深い悲しみと秘められた強い意志を感じさせる別の曲が、女性歌手によって歌われた。

私は、心が金縛りにあったようにその音楽に反応し、嗚咽に襲われた。

フルコーラスの最後の小節に再び「蛍の光」のメロディが重なり、大きなうねりのような感動が会場の聴衆を包み込んでいるのが映像から伝わってきた。高齢の人も中年の人も若い女性も、涙を堪えながら一緒に歌詞を口ずさんでいた。

どうして、「蛍の光」が・・。

ネットで調べて少しわかった。

「蛍の光」が、スコットランド民謡のメロディに内容の全く異なる日本語の歌詞をつけた曲であることは以前から知っていたが、アメリカ人宣教師が賛美歌として韓国に伝えていたこの「Auld Lang Syne」のメロディに、ユン・チホが歌詞をつけて韓国の民衆に歌われ、１９１９年の「三・一独立運動」を受けて上海に樹立された「大韓民国臨時政府」がこの曲を「愛国歌」と採用して以降、独立を願う韓国民衆に歌い継がれてきた曲であることを知り、驚くとともに深い感動を覚えた。

１９４８年の光復節独立記念式典で李承晩大統領がこの歌詞のままメロディを今日の国歌に変えて以降、現在でも国民の間で愛唱されているという。

つまり、この「愛国歌」（「蛍の光」のメロディ）は、キリスト教宣教師によって韓国にもたらされたスコットランド民謡「Auld Lang Syne」由来の賛美歌が元になったもので、日本の朝鮮植民地支配からの独立を願う民衆の心の歌であった、ということになる。

なんということだろう・・・

このメロディが「柳寛順」の抗日闘争のバックに流れた背景が少し分かったように思えたが、この曲の歴史とその想いは聴衆の若い女性にも共有されている、ということなのだろうか。

そして、このメロディを引きついで歌われたあの格調高い悲歌は、どのような曲なのだろう。この美しい歌姫は、なんという名前なのだろう。

どうして聴衆は、老若男女を問わず、感動を露わに涙しているのだろう。

字幕の韓国語も読めない私は、韓国の友人にこれらの謎解きを頼んだ。

彼女から、すぐにメールが返ってきた。

この動画は、昨年3月1日の「三・一独立運動100周年記念」で柳寛順烈士の犠牲を記憶するために製作された映画とコンサートを一つに編集したものであり、「愛国歌」（蛍の光メロディ）の後で歌われた曲は、ソン・ソヒが歌う「松よ松よ青い松よ」という曲であるという。

この「松よ松よ青い松よ」は、アン・チファンが作詞・作曲した民衆歌謡で、1987年以降1990年代頭まで最も人気のあった歌であり、1980年代の民衆歌謡に見られた短調の行進曲と短調の抒情歌謡の中心傾向をそのまま引き継いでおり、民主化運動に随行する人々の苦痛と窮極的勝利について歌った内容だと教えてくれた。

メールには、「松よ松よ青い松よ」と「愛国歌」の歌詞が、韓国語と日本語翻訳併記で添付されていた。この「松よ松よ青い松よ」の歌詞の一部、リフレインするサビには、抗日の深い暗示が込められているように読めた。歌詞の全文日本語訳を紹介する紙幅はないが、象徴的なそのサビ部分だけでも紹介したい。

松よ松よ青い松よ
（솔아 솔아 푸르른 솔아）
東風に揺らぐな
（셋바람에 떨지 마라）

この謎解きに触発されて私は、韓国における抗日独立運動の背景となった日韓併合について有島武郎がどのように見ていたのか、改めて思い起こした。

「三・一独立運動」が決起する時代背景である日韓併合（1910）の前史となった「ハーグ密使事件」（1907）について、その本質を見抜いていた有島武郎は、ティルダ・ヘック宛の手紙（1907.7.18）の中で、次のように書いている。

「僕は心の底からこのような政治家や愛国者を憎みます。（中略）朝鮮を助けるという口実のもとに、日本はかの国を強く支配して、その内閣を傀儡にしてしまったのです」（原文は英文小玉晃一訳）

また、この手紙の8日後の1907年7月26日の日記「観想録」には、ハーグ密使事件についての自説を展開した上で、次のように書いている。

「我レハ亦弱者ヲ圧制シ盗賊ノ如ク掠奪ヲ事トスル人ヲ見タランニハ義憤ヲ発シテ彼ヲ詰責ス可キ意気ト勇気トヲ有セリ」

さらに1909年7月6日、「韓国併合」閣議決定の際には、「この日、朝鮮民族の心情やいかんと涙する」とも記している。

白樺派の中でも韓国の民衆に深く心を寄せたのは、有島武郎と柳宗悦であった。

「松よ松よ青い松よ」の歌詞には日本に対する鋭い問いかけが籠められていると感じたのは、私だけのバイアスだろうか。

※動画は次のURLです。（クリックしてください）
https://www.youtube.com/watch?v=M1FUv8gX1eg

ラジオトークに出演して
収録後の感想ひとこと

イトウと歴史と有島ポンド

オビラメの会事務局長
川村洋司

土香る会の梅田さんからラジオ番組への出演を依頼された時には正直戸惑いました。土香る会は「有島記念館と歩む会」を掲げて活動しており、私たちの「オビラメの会」も有島記念公園内にイトウの飼育を目的とした池（有島ポンド）を設けているとはいえ、記念館をあまり意識して活動を組み立ててこなかったので、何を話したらよいのかわからなかったからです。オビラメの会の活動を話す中で有島ポンドのことを話の中に入れてくださいということで出演を了解し、事前に詳細な打ち合わせをして、何とか収録にこぎつけた次第です。

ニセコ町における有島記念館の存在がそうであるように、人間も含めすべての存在にはたどってきた歴史の記憶が詰め込まれています。生物であれば姿かたちや生き方の特徴であり、人間はというと、個々人の特徴はもとより、文化であったり風土・習慣、景観などもその一部でしょうか。保護を進めるということは、こうした記憶を取り出し理解して紡ぎ合わせることです。私たちが保護を図っているイトウ（オビラメ）でいえば生活史はどのように組み立てられているか。河川環境の多様性を成長に応じてどのように使い分けているか。生まれた河川にこだわりが強く、巨大化して何年にもわたって産卵するのはなぜかなど、生態的特徴の一つ一つが、イトウが今日まで生き延びてきた歴史の集大成です。そんな歴史を紐解く繰り返しを通じて彼らを理解し、彼らの生き残りの手助けを行う、これがオビラメの会の「オビラメ復活30年計画」です。こんなことを強く意識しながら、井上さんや梅田さんの巧みな話術に載せられて、楽しくオビラメの会の活動内容などの話をさせていただきました。話が弾んで1回の放送予定が2回に延長してしまいました。

有島ポンドは２０１５年秋に有島地区住民のコンセンサスを得て、有島公園内の第２カシュンベツ川畔にイトウ親魚の飼育と保護活動の広報を目的に、私たち「オビラメの会」が造成しました。はじめは試行錯誤での飼育管理でしたが、住民参加の餌やり体験やイトウの採卵会、記念館での講演会などを行い、観察に訪れる住民も徐々に増え、有島記念公園の雰囲気にもなじんで、その素晴らしい景観の中に少しずつですが溶け込んできたように感じます。さらに今回、土香る会のラジオ番組にお誘いをいただいて、有島地区にそれなりの位置を置かせていただいたのかなと思っています。

私たちの30年計画も、早20年が過ぎ、昨年ようやく実験河川での放流稚魚に由来する第２世代親魚の自力再生産の確認に至りました。これで彼らの自力による復活にメドが立ったことになります。残る10年は有島ポンドを拠点に、生産されたイトウ稚魚を用いて尻別川全域にイトウを復活させることと、流域の象徴としてのイトウへの関心を全流域の住民に広げることです。有島地区の皆さんには、これからも変わらぬご理解をお願いいたします。尻別川イトウのこれからたどる歴史の中に「有島ポンドとオビラメの会」の記憶が刻まれ続けることを願って。

※川村さんは昨年の10月と11月の2回、スタジオでラジオトークに参加してくださいました。

アイルランド系アメリカ人の歴史におけるアイデンティティ

マイケル・バーンズ

アイデンティティ（同一性）は、客観的に分析できるものなのか。日本でも自己アイデンティティが話題になりつつあるが、様々なルーツを持っている人々が集まっているアメリカ合衆国では、この話はすでに歴史に深く刻まれている。

この度、土香る会の誘いを受け、ラジオ番組に参加させていただいた。アメリカ出身の国際交流員として異文化交流が主な仕事になっているのだが、細かいところまで話ができるのは、このような番組に限られているのでとてもいい機会であった。

私の家族は約１５０年前にアイルランドからアメリカに移住した。ちょうどアメリカの南北戦争のころである。国が二つに分割され、奴隷制度をめぐって殺しあった。移民である先祖たちは、この恐ろしい状況に陥ってどうすればいいのか、迷っただろう。

それから初めてのアイルランド系の大統領、ケネディ大統領が選挙で大勝するまで、１００年以上かかった。この１００年間、どうやってアメリカ人として認めてもらえるのかという不安から、どうすればアイルランドのアイデンティティを守れるのかと話題になった。現在ではアイルランド系のアメリカ人は殆ど自分のことを普通にアメリカ人だと思っているようだが、その時代の移民たちや移民の子供たちは、自分が果たしてアメリカ人なのか、或いはアイルランド人なのか、という疑問を持っている人が多かった。アイルランド系アメリカ人とはそもそもアメリカかアイルランドかどちらの方が強いのか。個人によってその答えは異なっていただろう。

アイデンティティは簡単にまとめるものではない。個人の置かれる環境によって自分のことをどう思うのかが変わる。私もそうだ。子供のころ、幼稚園の先生と舌戦を交わすことがあった。聖パトリックの日に、私はクローバーのことをアイルランド語の「シャムロック」と自然に呼び、そして先生に「違うよ」と言われた。その時、自分の家族がアイルランド系だと強く感じた。また、大学一年生の時に函館に留学し、そこの夏祭りに参加した時のことだ。パレードで生放送をしていたパーソナリティーが私を見ると、「お！外国人だ！Hello!」と、マイクで話しかけてきた。その時、白い顔を見られてすぐに外国人と呼ばれたから自分が白人だと感じた。このように、自分のアイデンティティが変わっていく。

１００年以上前に、有島武郎はアメリカに留学した。そのころ、アメリカの政府の法律によって中国人の移住は禁止とされていた。日本人は中国人と何が違うかわからないアメリカ人が非常に多く、有島は周りの人から自分がアジア系の人だと感じさせられただろう。そして、ハバード大学等で勉強し、社会主義者にもなった。色々な経験を重ね、自分の私見や価値観が強くなって、今のニセコ町にも影響を与え続けている。彼のアイデンティティは彼の残した本などに今までも反映されているといえよう。

※マイケルさんは今年の１月と２月の２回、スタジオでラジオトークに参加してくださいました。

※ラジオトークでは、ゲストの方から、ご自身と「有島」との関わりについて、大変興味深いお話をお聞かせいただいています。

※ラジオ放送を聞き逃した方でご希望があれば、放送音源データを個人試聴用に差し上げていますので、事務局までお申し出ください。

有島に吹く風
帰りなんいざ、オリオンの囁きが

土香る会副会長　菊地　寛

暖気と少雪の２０２０年があけ、断続する厳しい寒気に不安と怖れが交錯した２月の記憶です。バレンタインデー前夜は満天の星空でした。星座表を手に南東の方角へ目線を上げると、冬の大三角に連なるのがオリオン座。三連星のベルトをキリリと締め、右手で高くこん棒をふりかざす猟人（かりうど）オリオン、その肩あたりに鈍く光るのが、かの一等星ペテルギウスでしょうか。ギリシャ神話の構図が古里への想いにかさなりました。

１年前でした。「新しい映像作品を制作・公開したいわね」とわが先達のご発言。土香る会４月総会での一コマです。現在も有島記念館で上映されている「有島武郎 - 理想の軌跡」（15分）に続く記録映像をとの構想に、僭越ながらラフ・スケッチを描いてみました。

「ニセコの詩 - 四季あざやかに・有島の里」（仮タイトル）～大正・昭和・平成・令和を生きる地元90代女性の眼差しにより、住み暮らす人々、訪れる人々との関わりをも重ねながら、春夏秋冬大きな自然に抱かれて息づく、かつての有島農場一帯の「今」を、映像と詩（うた）によって描く～。

次はプロットだ。なのに、天高く、行く手に幾層もの厚い壁。玄冬・あの夜も、こんな時の習い性でまた天空を仰いでいました。ふと聴こえたのは、吾の嘆息だったか、いやオリオンの囁きではなかったか。勇者オリオンが武具を農作業の大鍬に持ち替えて、とは見えないか。あ、右肩の星ペテルギウスは、昨秋から急に光度を下げている。素人目にも確認できます。やがて最期を迎え、超新星爆発、そして見えなくなる、とは全国紙夕刊のトップ記事でした。

迷夢から醒めようとして、目線を地平に凝らします。耳の奥に「帰りなん　いざ　田園将に蕪（あ）れなんとす」（陶淵明・帰去来辞）の声。呼応して「君の上にも確かに、正しく、力強く、永久の春が微笑めよかし」（有島武郎・生れ出ずる悩み）と、響いてきました。

季節は巡りました。３月の風は、野に花咲く青春の息吹です。天空と大地と、そして人間と。星雲が春霞のように降りて薄衣を揺らします。「ニセコの詩」を奏でるように。

◇このエッセー欄を前副会長・菊地昌子さんから引き継いで担当させていただきました。文中の映像制作を提起されたその方です。百里の道の一歩になれば、と記しました。

小生これを以て任を終え、次回から若手後任の方へとバトンタッチです。　謝謝。

編集後記

全く以て分からない。新型コロナウイルスのパンデミック（世界的大流行）宣言は出たが、ニセコ地域は感染者が一人、後志全体でも四人のみだ（３／27現在）。

外国人が多く訪れるので予防対策が行き渡っていたという見方がある一方で、システムが機能しているのか疑問視する声もある。感染者数を増やさないために開業医、保健所、各都道府県の帰国者・接触者相談センター、国立感染研の連携がどこかで意図的に絶たれ（つまり忖度され）ているとの憶測がそれだ。

この憶測は言うまでもなく、都合のいい数字だけを出す国の統計操作が遠因だ。何を信用したらよいか分からないのでは、買いだめに走るのを防げない。日本版パンデミックを宣言したくなる。／井

二〇二〇年三月三十一日発行
発行　土香る会（有島記念館内）
〒０４８・１５３１
ニセコ町字有島５７
０１３６・４４・３２４５